

《論文》

# ロンドンオリンピックにおけるイギリスの メダル獲得に関する評価

荒井 宏和

Evaluation of Great Britain's medal success at the London Olympic Games

Hirokazu ARAI

キーワード：ロンドンオリンピック，メダル獲得，ミッション2012

Key Words: London Olympic games, Medal Success, Mission 2012

[Abstract]

The purpose of this study is to compare and analyze Gold Medal tally of Team GBR at the London Olympic Games with the previous 3 Olympic Games.

The medal acquisition rate of GBR increased compared to the Athens Olympic Games.

Moreover, the gold medal acquisition rate of GBR showed the highest value.

The background of this result is a long-term strategy concept, based on "International Training and Competition", "Training Facilities", "Athlete Personal Award", "Support Systems", "Medicine and Science Support", "Coaching and Management Support". It is thought that through the establishment of a World Class Performance Program GBR had a very successful London Olympic Games.

## 1. はじめに

第30回オリンピック夏季大会は、イギリスのロンドンで開催され、ここに世界204の国と地域からアスリートを含む関係者が参集した。今大会では、過去に出場実績がないカタール、サウジアラビア、ブルネイから女性アスリートの初参加があり、さらにグレナダ（金1個）、グアテマラ、ガボン、キプロス、モンテネグロ、

ボツワナ（各銀1個）、バーレーン（銅1個）の各国が初のメダル獲得をもたらしたことによって、メダル獲得国の拡充が図られ、今後さらに国際競争の激化が予想される。

これに対し、各国の取り組みは、競技者や指導者の育成など人的資源の有効活用、施設、資金に関わる環境資源の整備などを網羅した長期戦略プランの策定と実行が必要となる。例えば、カナダの「Own the Podium2010」は、2010年

に開催されたバンクーバーオリンピック大会に向けて、自国開催が決定した直後に、国内スポーツ組織の改革による強化費の統合とメダル獲得の可能性を有する競技団体に対する資金の重点配分、スポーツ医科学サポート、大学や関係諸機関との連携を推進させた。その結果、金メダルの獲得数としては、世界第1位という成果を得た。

同様に、今回のロンドンオリンピックにおいても、開催国となったイギリス（以下、GBR）は、「Mission2012」による長期戦略計画を策定し、これに向けてメダル獲得のシナリオを描いた。

本研究では、GBRにおけるメダル獲得の成果を各国との比較から、ロンドンオリンピック大会の成果について考察するものとする。

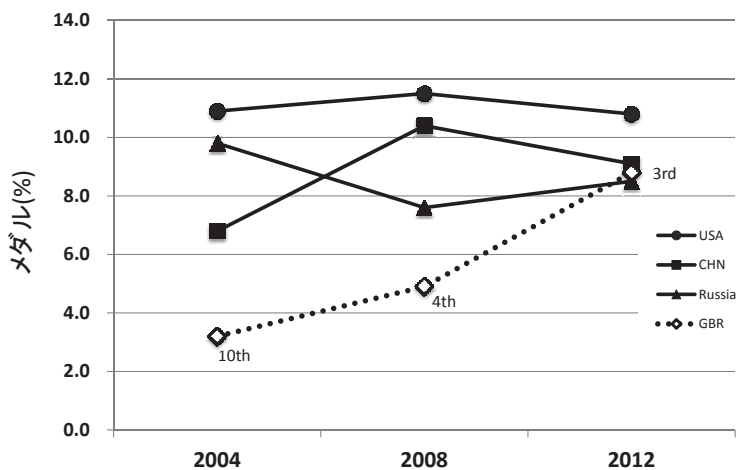
## 1. 主要3カ国とGBRにおけるメダル獲得について

アテネ大会（2004年）でメダルを獲得した国

は、参加201カ国中74カ国（36.8%）であった。また北京大会（2008年）では、参加204カ国中86カ国（42.2%）であり、ロンドン大会（2012年）では、参加204カ国中85ヶ国（41.7%）であった。このことから、メダルを獲得する機会を得ることができたのは、全体の半数以下の国であったが、北京大会以降増加傾向にあった。

このうち、GBRが獲得したメダルは2004年のアテネ大会において、メダル総数925個に対して3.2%（メダル獲得数30個）となり、国別総メダルランキングは第10位であった。北京大会では、全体のメダル総数958個に対して4.9%（メダル獲得数47個）となり、国別総メダルランキングは第4位あり、ロンドン大会では、全体のメダル総数962個に対して6.8%（メダル獲得数65個）となり、国別総メダルランキングは第3位となった（図1）。

アテネ大会以降、3大会のメダル獲得変化率をアメリカ、中国、ロシアの主要3カ国とGBRで比較するために、Category I（アテネ大会vs北京大会）、Category II（北京大会vsロンドン



\* 図中の数字は、GBRの国別メダル総メダル獲得ランクを示す

図1 主要3カ国とGBRにおける総メダル獲得率の推移

大会), Category III (アテネ大会vsロンドン大会) に分類した(表1)。その中で, アメリカはCategory I で5.5%増加したが, Category II で6.1%, Category IIIで0.9%マイナスとなった。中国は, 自国開催までのCategory I で52.9%増加したが, Category IIのロンドン大会では, 12.5%減少した。ロシアは, 北京大会以降のロンドン大会で11.8%増加したが, Category I では22.4%, Category IIIでは13.3%減少した。最後にGBRは, Category I (53.1%), Category II (38.8%), Category III (112.5%) の全てにおいて増加傾向を示した。

次に, GBRにおける各メダル獲得率の推移を Category I (アテネ大会vs北京大会), Category

II (北京大会vsロンドン大会), Category III (アテネ大会vsロンドン大会) に分類した。Category I では, 金 (110%), 銀 (43.3%), 銅 (13.5%), Category II では, 金 (52.4%), 銀 (30.2%), 銅 (26.2%), Category IIIでは, 金 (220%), 銀 (86.7%), 銅 (43.2%), であり, Category IIIにおける金メダルの変化率が最も高かった(図2)。

## 2. GBRにおける選手団構成とメダルについて

ロンドン大会に出場した選手は, アメリカ274名, ロシア229名, 中国218名, GBR269名であった。このうち, 出場した選手の中で, 最

	Category I		Category II		Category III	
	Athens vs Beijing (2004)	Beijing (2008)	Beijing vs London (2008)	(2012)	Athens vs London (2004)	(2012)
USA	5.5		-6.1		-0.9	
China	52.9		-12.5		33.8	
Russia	-22.4		11.8		-13.3	
GBR	53.1		38.8		112.5	

表1 主要3カ国とGBRにおけるメダル獲得の変化率

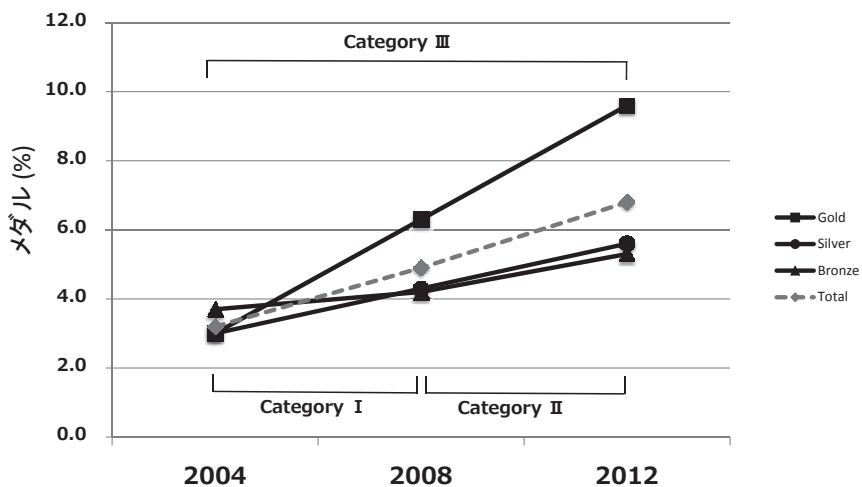
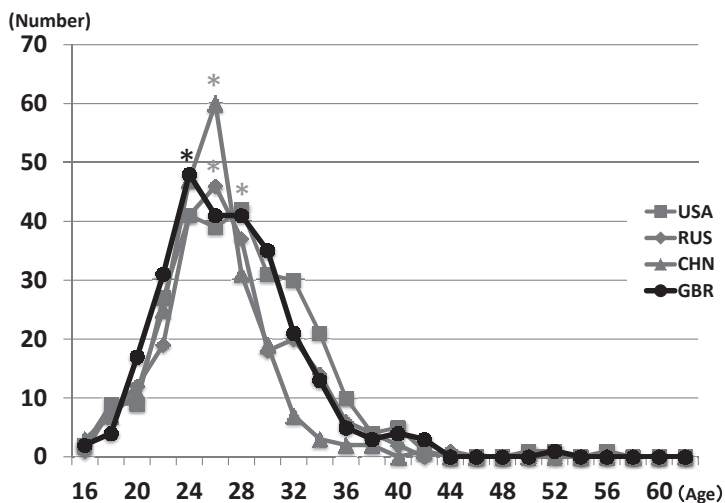


図2 GBRにおける各大会のメダル獲得率推移



\*は、各国年齢層のピークを示す

図3 各国選手の年齢構成

も人数が多い年齢層は、アメリカが28歳に42名、ロシアが26歳に46名、中国が26歳に60名、GBRが24歳に48名であり、GBR選手団が最も若い年齢層の選手で構成されていた(図3)。

GBRが獲得したメダルを競技別に比較すると18競技のうち、Cycling (Track), Sailing, そしてSwimmingの3競技(16.7%)がメダル数を減少させた(表2)。一方で、Equestrian, Gymnastics, Rowingの3競技が、前回大会よりもメダル獲得数を3つ増加させ、Athletics, Boxing, Judo, Tennis, Triathlonが2つ、Canoeing, Diving, Hockey, Shooting, Taekwondoが1つであった。

メダルを獲得した競技(種目)のうち、Canoe-Sprint, Modern Pentathlonなどで初めてメダルを獲得した競技種目があり、Gymnastics-Artistic (Team), Diving, Rowing, Equestrian, Field Hockeyなど北京大会はメダルを獲得できなかった競技種目においてもメダルを獲得することができた(図4)。

### 3. メダル獲得の背景

#### (1) ミッション2012

UKスポーツにおける2011~12年度の予算は、国庫基金から£60.651m(約75億円)、ナショナル・ロタリーから£70.045m(約86億円)の合計£130.696m(約161億円)の資金が計画された。

国庫基金の用途は、競技団体支援、国際連盟英国代表者支援、他国との相互利益のある国際連携構築促進、雇用・運営に当てられた。またロタリー資金は、World Class Performanceシステム及びWorld Class Eventsプログラムなどに充てられたのである。

2011-12年度は、4年サイクルの初年度であり、前年度と比較して、国庫基金予算は28%削減されたが、ナショナル・ロタリーからの予算は増加したのでナショナル・ロタリーは£49.8m(約61億円)となっている。

英国アスリート支援プログラムの資金源

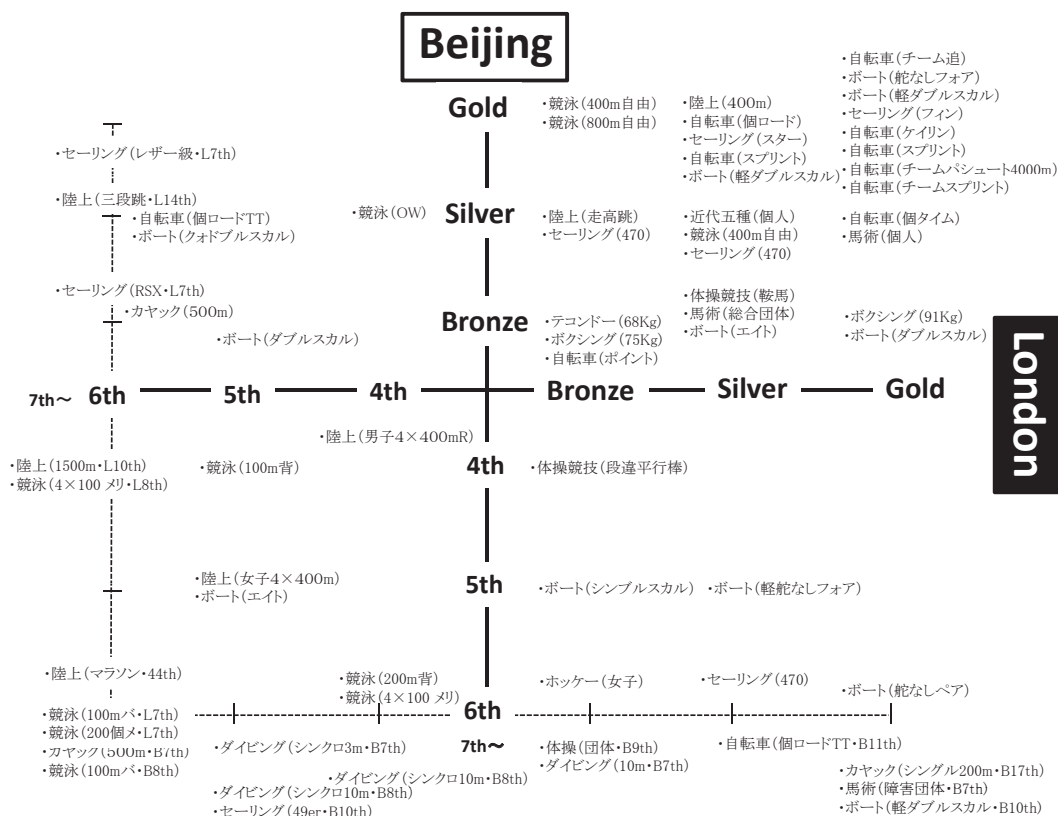


図4 北京大会とロンドン大会の種目別相対順位

は、国庫基金、ナショナル・ロッタリー、Team2012の3つである。

Team 2012は、2009年から始まったファンドレージングで、Team GBやParalympic GBの代表選手になるための公式支援プログラムであり、これまで1200名以上が対象となった。

Team 2012は、UKスポーツ、イギリスオリンピック協会、イギリスパラリンピック協会、大会組織委員会、及びパラリンピック組織委員会のパートナーシップで運用されている。2009年に計£6.5m（約8億円）がTeam 2012からオリンピック・パラリンピックアスリート及び競技団体への直接的助成金として提供され、更に2012年に£0.75m（約9,500万円）をWorld

Class Performance プログラムを通して提供された。

UKスポーツが考える勝利の方程式には、「海外での合宿や競技会に参加すること」、「トレーニング施設の設置」、「アスリートへの生活支援」、「サポートシステム」、「医科学サポート」、「コーチングおよびマネジメントサポート」であるとし、組織のガバナンス強化が求められた。そこでGBRは、Performance and Mission2012戦略を計画した。この計画によると、2009-2013年のオリンピック前後において、世界クラスのパフォーマンスプログラムとして£213mの予算を確保すること、勝利のための妥協は一切許されないこと、また2008-2012年

Olympic Sport	Gold	Silver	Bronze	Total
Athletics	4	1	1	6 (2)
Boxing (Amateur)	3	1	1	5 (2)
Canoeing (Slalom)	1	1	0	2 (1)
Canoeing (Sprint)	1	0	1	2 (0)
Cycling	7	1	1	9 (-3)
Diving	0	0	1	1 (1)
Equestrian	3	1	1	5 (3)
Gymnastics	0	1	3	4 (3)
Hockey	0	0	1	1 (1)
Judo	0	1	1	1 (2)
Modern Pentathlon	0	1	0	1 (0)
Rowing	4	2	3	9 (3)
Sailing	1	4	0	5 (-1)
Shooting	1	0	0	1 (1)
Swimming	0	1	2	3 (-3)
Taekwondo	1	0	0	2 (1)
Tennis	1	1	0	2 (2)
Triathlon	1	0	1	2 (2)

( ) は北京大会との差

表2 UKスポーツにおける各競技種目の強化費及びメダル予測と実績

間のスポーツにおける資金を25のオリンピック、パラリンピック競技に140の研究やプロジェクトを提供することなどとした。そのためには、UKスポーツは競技者の発掘と育成プランが求められる一方で、自国開催のオリンピックまでの時間を考えると、メダル獲得に至る経過、可能性に焦点を絞り、独自に資金配分を行った<sup>1)</sup>。

## (2) 新たな人材の発掘

UKスポーツは、ロンドン大会に向けて新たな競技者を見つけるためのタレント発掘（以下、TID）を積極的に行ってきたことも影響する。2006年にロンドンにおいてオリンピックが開催されることが決定した以降、UK-TIDチームを発足。ロンドン大会でメダル獲得の可能性があり、高いレベルの女性アスリート（17歳から25歳）を発掘するために、スケルトン、カヌー、近代五種、ボートそしてセーリング競技をターゲットとして新たな人材の発掘を行ってきた。過去に、Rebecca Romero選手は、26歳で自転車競技からボート競技の種目転向し、北京大会でメダルを獲得した。また、Shelly Rudmanは、陸上競技のハードル種目から21歳で種目転向し、その4年後にトリノ大会で銀メダルを獲得した。このように既存の実績をふまえ、他にもTIDプログラムが実施された（表3）。その結果、2007年に本プログラムがスタートし、オリンピックの前年までに170名の選手が発掘され、このうち51名がメダルを獲得した。また、国際大会の出場（160回）、国際大会におけるメダル（54個）、世界選手権におけるメダル（8個）、ワールドカップにおけるメダル（9個）、ヨーロッパカップにおけるメダル（14個）、世界記録（1つ）という成果

ン、カヌー、近代五種、ボートそしてセーリング競技をターゲットとして新たな人材の発掘を行ってきた。過去に、Rebecca Romero選手は、26歳で自転車競技からボート競技の種目転向し、北京大会でメダルを獲得した。また、Shelly Rudmanは、陸上競技のハードル種目から21歳で種目転向し、その4年後にトリノ大会で銀メダルを獲得した。このように既存の実績をふまえ、他にもTIDプログラムが実施された（表3）。その結果、2007年に本プログラムがスタートし、オリンピックの前年までに170名の選手が発掘され、このうち51名がメダルを獲得した。また、国際大会の出場（160回）、国際大会におけるメダル（54個）、世界選手権におけるメダル（8個）、ワールドカップにおけるメダル（9個）、ヨーロッパカップにおけるメダル（14個）、世界記録（1つ）という成果

プログラム	スタイル	特徴
Sporting Giants	種目転向型	ボート、ハンドボール、バレーボール、UKスポーツとイギリススポーツ研究所(EIS)の共同で、2007年に開始
Girls4Gold	非転向型	ボブスレトン、カヌー、近代五種、ボート、セーリングへの女子アスリートを対象
Pitch to Podium	種目転向型	サッカー、ラグビーから他の種目への転向
Tall and Talented	種目転向型	長身選手をボート、バスケットボールへ。ただし、バスケットボールの経験は必要ないが、身体的な強さ、健康、敏捷性が高さなどが必要とされる
Fighting Chance	種目転向型	格闘技経験者からテコンドーへの転向
Power2Podium	非転向型	スピードとパワーを兼ね備えた選手を陸上競技、カヌー(スプリント)、自転車(スプリント)、ウェイトリフティング、ボブスレトン、ボブスレー、セブンスラグビーへの転向

表3 TIDプログラムとその主な特徴

をおさめた。実際にロンドン大会では、ボート(女子ペア)に出場したHelen Glover選手が「Sporting Giants」プログラムから発掘され、金メダルを獲得した。

一方で、競技団体独自に行ってきたTIDプログラムがあり、自転車競技(ロード)で銀メダル1個、ボート競技で金メダル4個と銅メダル1個を獲得した。

#### 4. まとめ

競技力向上によってメダル獲得にいたるまでの背景について、3つの要因による構造的背景が起因するとされている<sup>3)</sup>。そこには、国家政策レベルからアスリート個人またはその周辺環境の分野に分類され、さらに3つのレベルに分類される。1つは国家経済や人口、福祉にいたるマクロレベルである。例えば、これには国内総生産(GDP)、人間開発指標(HDI)およびジニ指標(富の不平等の基準)によるアプローチ<sup>4)</sup>などの研究がされている。次にメゾレベルでは、スポーツ政策、スポーツ戦略など

の要因があり、これには、主観的評価をもたらす競技種目(ボクシングや体操競技など)と客観的評価をもたらす競技(重量挙げなど)を比較した場合、開催国における有利性(ホームアドバンテージ)は、主観的評価群にあり、審判の決定が観客の声援や音に大きく影響するという現場の視点からみた戦略的アプローチ<sup>5)</sup>もある。最後にミクロレベルでは、遺伝子など医科学レベルのアプローチがそれにあたる。これらは、オリンピックや競技力向上をテーマに掲げた多くの研究のひとつでもあるが、今後その国のメダル獲得に向けた戦略を学際的で、多角的なアプローチから評価することが多く求められることとなる。

メダル獲得の推移から、自国開催までのプロセスの中で、長期戦略を掲げてボトムアップさせる取り組みは、これまでいくつかの国が試みてきたことである。それぞれの国の事情を加味すると、必ずしも同レベルで評価することはできないが、長期戦略プランを掲げ目標に向けた取り組みを実行することは変わらない。GBRがロンドン大会で獲得したメダル数が増

加した背景には、選手やコーチに多くの国際経験をさせることと、サポート体制の充実に焦点が充てられたことが要因となり、そのために国家予算の有効活用によってトップスポーツに充てられ、医科学やTIDプログラムに代表される個々に焦点を充てた取り組みと競技団体の変革による融合が成功への鍵になったのではないかと考える。

#### 参考文献

- 1) UK Sports Annual Report and Accounts 2011/12
- 2) 山本真由美：「先進スポーツ国家」へ？—イギリスのエリートスポーツ政策の分析—,Vol.2,2008.
- 3) De Bosscher, V., De Knop, P., Van Bottenburg, M., Shibli, S. A Conceptual Framework for Analysing Sports Policy Factors Leading to International Sporting Success. *European Sport Management Quarterly*. 6 (2): 185-215, 2006.
- 4) Lewis G. Halsey; The true success of nations at recent Olympic Games: comparing actual versus expected medal success, *Sport in Society: Cultures, Commerce, Media, Politics*, Volume 12, Issue 10, pp, 1353-1368, 2009.
- 5) NJ Balmer, Modelling home advantage in the Summer Olympic Games; *Journal of Sports Sciences*, 21 (6): 469-478, 2003.